

中世のラテン語叙事詩 “Waltharius” の翻訳並びに研究 (1)

丑 田 弘 忍

第 1 部 翻 訳

凡 例

1. 本文における () の記号は訳者が補なった個所
2. 人名, 民族名, 地名, 山, 河等の固有名詞は原則としてラテン語風に表わした。近代語, 並びにわが国の呼び方と著しく異なる場合はその都度注を付した。国名が明確でない場合には民族名で表わした (例えばフニ人)。固有名詞における母音の長短はこれを廃止した (例えばレーヌス河はレヌス河)
3. 原文は六脚韻の韻文であるが本訳においては散文とした。散文訳の性質上, 原文を忠実に訳出する事に努めた。
4. テキストは K. Strecker の校訂になる Waltharius, Monumenta Germaniae Historica, Poetarum Latinorum Medii Aevi, Tomus VI, Fasc. I, Vimariae 1951 を使用した。

^{とも} 朋よ, 世界の第三の領域はヨーロッパと呼ばれ, 習わし, 言語, 氏に従い, 種々の民族に分かれ, 文化や信仰に従っても分かれている。これらの中にパンノニア⁽¹⁾の^{やから}族が占めていることが知られていた, だが我等はこの族をもっぱらフニ人⁽²⁾と^{びと}呼び慣わしている。この凜々しき族は, その武力と剛毅さで輝き, 周りの国々を征服したのみならず, 大洋の岸边にまで進み至り, 屈服したるものと盟約を結び, 逆らうものを打ち伏した。(こうして) 幾千年もの間 (この族は) 支配権を握っていたと伝えられている。(10)

(1) ドナウ河中流に沿う古代ローマの地方名, 現在のハンガリア地方

(2) フン族

かつてアッティラ王⁽¹⁾がこの王国を支配していて, 絶えず前の勝利を更新しようと心がけていた。彼は陣営を移動させて, フランキア人⁽²⁾を奇襲するように命じた。彼ら(フランキア人)の王ギビコ⁽³⁾は, さきごろ生まれた子を喜びながら——この子の事を私は後に語ろう——高き玉座にて力をふるっていた。実に彼がもうけた嗣子^{しし}に彼はグンタリウスと名づけた。(16)

(1) フン族の王, 434—453.

(2) フランク族

(3) 「ニーベルンゲンの歌」では Gibeche の名が挙げられている

うわさが戦戦恐恐の(ギビコ)王の耳にすばやく達した。それは楔形の(隊形をなした)敵(の軍勢)がヒステル河⁽¹⁾を渡り, その数は星をも, 河の砂をも凌ぐほどであるということであった。(だが)ギビコ王は武力をも, 人々の力をもあてにせず, 評定を開き, いかに対処すべきかを問うた。唇並ぶ者は総て, 盟約を申し入れ, もし敵が握手で迎えれば, 握手で答え, 人質をさし出し, 命ぜられた税を支払うことで, 一致した。それは, 彼らが生命と共に国土をも, さらに彼らの妻や子供をも失なうよりもはるかに結構な事であろう。(26)

(1) Hyster ドナウ河

この頃ハガノという優れた素質を持った, トロイア人の後裔⁽¹⁾で, 高貴な血筋の子息がいた。グンタリウスは, 母親がいなくてもひよわな生命を保っていける年頃に, いまだ達していなかったなので, このハガノを莫大な宝物を添えて(アッティラ)王のもとへ送る事が決められた。ただちに使者は貢物と子供を連れて, (フニ人のもとに)到着し, 平和を願い出, 盟約を結んだ。(33)

(1) フランク族が古代トロイア族の末裔であるという寓話があったと思われる。

(Vgl. A. Heusler : Nibelungensage und Nibelungenlied S. 18)

同じ頃ブルグンディア⁽¹⁾は強大な王権の下にあり, その支配権をたまたまヘリリクス⁽²⁾が掌握していた。彼にはヒルトグントという名のただ一

人の娘があり、まさしく気高さと美しさという誉れにより、ひとときわきわだっていた。彼女は嫡女として祖先からの城にとどまり、そして、許されるかぎり、(祖先によって) 集められたものを長く享受しなければならなかった。(39)

(1) ブルグント王国

(2) 「ベーオウルフ」の中で Hererik の名が挙げられている。

実にアヴァレス⁽¹⁾人はフランキア人と固い和睦を確し、彼ら(フランキア人)の領土の境界のそばで停止した。アッティラはしかしただちにブルグンディアへ向かって迅速の手網をあやつった。そして残りの者も王の跡を追うにはばからなかった。彼らは列をととのえて、しかし長い隊列をなして進んだ。大地は馬のひずめにゆさぶられてうめき、大気は楯の響きにおそろしいほどに鳴りわたった。鉄の森⁽²⁾は輝き、一面の野原を赤々と染めた。(それはちょうど)早朝に太陽が海面にあたり、地上の最果てで美しく照り返っている時のようであった。すでに楔形の隊形をなした全軍はアラルとロダヌスの深い河を渡り、略奪をせんがため、分散した。(51)

(1) フン族の事

(2) *ferrea silva* 鐵兜の事

(3) Arar ソーヌ河, ローヌ河の支流

(4) Rodanus ローヌ河, スイスとフランスを流れる大河

ヘリリクスは折よくカピロヌム⁽¹⁾で陣を構えていた。そして見よ、見張りの者が、(遠方に)目を向けながらこゝ叫んだ、「なんたるもうもうたる埃の雲が立ち起っているのか。さあ、すべての門を閉ざしてください。」その時すでに、王自らフランキア人がいかにふるまったかを知っていて、長老の皆にこゝ語った。「わしらとは比べものにならぬぐらい勇猛な部族がパンノニア人に屈服した今となつては、いかなる勇氣を持って、わしらが白兵戦を行ない、祖国を守れるとお前たちは考えているのか? 彼らは条約を結び、そして税を取った方が一層得である。わしにたった一人の娘がおる。この娘を国のため引き渡す事をわしはためらわぬ。盟約を結びに行く者だけが旅立つがよい。」(63)

(1) Cabillonum 現在の北フランスのシャロンシュールソーヌ

全く武具を身に付けずに使者は出発し、王の命令により託されたる事を敵方に伝え、劫掠をやめるよう、乞い願った。首領のアッティラは、いつものように、この者たちを愛想よく迎え、そして言った、「わしは人々に戦いをもたらすよりもむしろ条約を（結ぶことを）望んでいる。フニ人はたしかに平和的に治める事を好むが、しかし反抗したると認めたるものをしかたなく武力で打ちくだくものである。（お前たちの）王がわしらのもとへ来て、右手をさしだし、そして（相手の右手を）取るがよい。」そこで（ヘリリクス）王は測りしれない宝物を携えて（アッティラのもとへ）出発した。そして条約を結び、娘を（人質として）あとに残した。こうして両親のすばらしい宝⁽¹⁾は他国へ向かって出発していった。(74)

(1) ヒルトグントの事

条約を結び終り、そして税を定めた後に、アッティラは西の国々へ兵を進めた。その頃アキタニア⁽¹⁾王国をアルペレが治めていた。彼にはウォルタリウスという名の、花のはじめに輝やける子息がいたと、人々は語っている。ヘリリクス王とアルペレ王は、子供たちが結婚の年頃になれば、彼らを一緒にさせようと、互いに誓を交わしていた。（しかし今や）アルペレ王は、これらの部族が蹂躙されている事を知った時、心の不安のため、激しく動揺し始めた。なぜならば、激烈な戦いで守れる望みはなかったからであった。（そこで）彼はこう言った、「もしわしらが戦いを行なうことが出来ないなら、何をわしらはためらっておろうか？ブルグンディアとフランキアがわしらに手本を示している。たとえわしらが、これらと同じに扱われても、咎められはしない。わしは使者を送り、条約を結ぶことを命じよう、そしてそれにたいして人質として最愛の息子をさし出そう、今やすでにわしはフニ人に今後の税を支払おう。」しかしなにを私はためらうことがあろうか？アウァレス人は多量の財宝を積んで、手に入れた人質、ハガノ、少女ヒルトグント、そしてウォルタリウスをも（引き連れ）、心楽しんで引きあげていった。(95)

(1) Aguitania フランス南西部、現在「アキテーヌ盆地」として名が残っている。

アッティラはパンノニアへ帰り、城へ入ってから、国許と別れた子供た

ちに大いなる愛情をそそいだ，そして自分の子と同じように養育するように命じた。彼は王妃に少女の世話を任せた，けれども二人の少年には己れの目の届くところに常にいるように命じた。しかしまた，彼らに諸々の技芸を，特に戦いの折に持つべき技を教えこんだ。彼らは一様に知性も年令も増し，力においては勇者を，思慮においては師を負かした。そしてついに今や勇敢に，総てのフニ人を凌ぐに至った。そこでアッティラは彼らを軍の指揮者にとりたてた。その事は全く不当な事ではなかった。というのは，彼が戦いを行なった時には，いつも（彼らは）すばらしい勝利により輝いたからである。それ故に，王はたいそう二人を重んじた。人質の乙女も最高の神の恵みにより，王妃の表情をやわらげ，上品な振舞と懸命な働きにより，（王妃の）愛を得た。ついに彼女はあらゆる宝物の思慮深いお庫番にさせられ，そして彼女自身が王妃と変らないほどであった。なぜなら，彼女が決めた総ての事を，彼女が行なったからであった。(115)

その間に，ギビコは^ゆ逝き，グンタリウスみずからが治世を受けついで，そしてただちにパンノニアの条約を破棄し，税を納めることを拒否した。今やハガノが他国にてこのことを聞き知るや否や，夜の間（パンノニアからの）逃亡を企て，主君のもとへ急いだ。だが（その頃）ウォルタリウスは戦いにおいてフニ人を凌いでいた。彼が向かうところには，たちどころに幸運がついてまわった。（アッティラ）王の妻オスピリンは，ハガノが（城から）遂電したのを心に留めて夫にこう言って忠告した，「あなたの権力の柱が揺がないように，王様の才知が予見し，用心することを願っております。つまり，あなたの友のウォルタリウスが行ってしまわないようにということなのです。あの人には（兵を）率いる強い力があります。それでもし彼がハガノに倣って逃亡しないかと憂いております。それ故に私の考えを汲んで下さいまし。まず彼が戻ってきたら，こう言って下さいまし，『そちはわしらに仕えてしばしばたいそう難儀を負ってきた，そのためそちは，わしらの好意がほかの臣下よりもはるかにそちを高く重んじてきたかを，知るがよかろう。その事をそちは，言葉よりも行ないにより認める事を，わしは望む。パンノニアの貴族⁽¹⁾から妻を選ぶがよい。

そして己れの貧しさを心配しなくともよい。もちろんわしは十分に土地と家でそちを豊かにするであろう。嫁をやる者はあとでその事を恥じないであろう』もしあなたがこう言うておしまいになるなら、あの人を留めることができますわ。」この話は王に気に入った、そして彼は（その事を）もくろみ初めた。(141)

(1) satrapes, 本来の意味は古代ペルシアの地方総督

ヴァルタリウスは（戦いから）戻って来た。王は彼に例の事を語り、妻をめとるよう勧めた。だがしかし彼自らその時すでに、将来彼が行ないにより満たすであろう事をおもんばかり、（王の）勧めに対してこう語り始めた、「（私の）わずかばかりのお仕えの有様を顧みてくださるのは、たしかにあなたがたの御好意によるものです。しかしあなたがたが私の心の怠惰を大目に見て耐えて下さっていることに、決して私は値し得ないでしょう。だが忠実な下僕の言葉をお聞き下さるようお願い致します。もし私が主君の命令に従い、妻をめとるなら、なにはともあれ私は新妻の悲しみと愛により縛られ、そしておおむね王の下僕である事が妨げられましょう。私は家を建て、国土の開墾をしなければなりません。そして結婚は、主君の目前で伺候し、かついつものように、フニ人の王国に、（私の）労苦をおしまぬ事を、妨げましょう。なぜなら（人生の）楽しみを味わったものはだれでも、次には辛苦を背負おうとしないのが普通です。常に主君に対して忠実に仕えているほかに私には好ましい事はありません。それ故、お願いですから、結婚の絆なく、この先も生涯を過すようお許し下さい。仮令夜に、または真夜中にでも私に命令して下さるなら、命ぜられる事はどんな事でも、私は恐れなく、すみやかに行なうでしょう。戦いの折に、いかなる懸念も退却するようにと（私を）うながしてはなりません。子供や妻が妨げになったり、臆病風をかきたててはなりません。豪気なる殿、もうこれ以上私に結婚を押し付けないように、あなた自身の生命とパンノニアの負けることのない族にかけて、今や私は明言します。」王はこの願いに屈し、ヴァルタリウスが逃亡することにより、決して（自分のもとから）去ってしまわない事を信じて、総ての説得を断念した。(169)

そうこうしているうち、さきほど制圧された一部族が反抗し、フニ人と戦いをまもなく始めようと構えているという確かな知らせが王のもとに達していた。(172)

そこで戦いを遂行することがウォルタリウスに与えられた。彼はさっそく全軍を整えて閲兵し、以前の勝利を絶えず思い起すように説き、そして常日頃の勇気でそれら反逆するものたちを打ちくだき、遠くの国々に恐れをもたらすことを約束して、彼の兵たちの心を勇気づけた。(178)

すみやかに彼は出陣し、そして軍勢があとに続いた。見よ、彼は戦陣を見渡してから、順序よく広々とした野原を貫いて戦列を布いた。すでに矢の射程圏内で楔形陣形をとった両軍が相対峙して歩を停めた。その時あたり一面に鬨の音が宙に向かってわきあがった。恐しげに角笛の合図が人声に入りまじり、絶え間なく投げ槍がこちらからもあちらからもひっきりなしに飛び交った。とねりこ⁽¹⁾とみずき⁽²⁾の槍がまざり合って一つの競技となった。投げられた槍は稲妻の如くに輝いていた。そしてあたかも北風の(吹く)時節に丸く固まりになった雪がまき散らされるように、(双方の軍勢は)残忍な矢を射ることに余念なかった。ついに双方の軍勢からすべての投槍が使いはたされた時、すべての手は刀にかけられた。彼らは輝く刀を抜き、そして楯をかざした。ついに(双方の)軍勢が入り乱れ、新たに戦いを初めた。しばしば馬の胸が(他の馬)の胸と突きあたって裂けた。武士どものあるものは堅固な楯の中高に(あたって馬上から地上に)ふり落された。だがウォルタリウスは立ち向かうものを刀でなぎり倒し、戦路を開きながら、真ただ中で激しく暴れ回った。敵は、彼がかくの如き殺戮を行なっているのを見るや、彼らは前に迫る死を見る事を恐れた。そして右であろうと左であろうと、ウォルタリウスが襲いかかるところに、すべて(の敵兵)はすばやく背を向け、楯を背にして、ゆるめた手綱で逃げ去っていった。その時パンノニアの力強き族は戦いの運命のもとで完全な勝利を握るまで、指揮者に倣って、ひとしお荒々しく戦いにいどみ、ひとしお大胆に殺戮を重ねていき、抵抗するものを地に打ちふし、逃れるものを絶え間なく(馬蹄で)踏みにじった。それからパンノニアの族は死し

たるものの上に突進し、あらゆる（武具）を略奪していた。そしてついに指揮者（ウォルタリウス）はうつろな角笛で（味方の）軍勢を呼び集め、そして彼は武士どもの前で、自らの鬢^{びん}を勝利の月桂冠で巻くことにより、まっさきに（自らの）額に荘重な葉冠を結んだ。彼のあとに旗手どもが従った。彼らのあとにその他の武士どもが従った。今や彼らは勝利の花冠に飾られて帰路についた。そしておのおの（の武士）は故郷へたどり着くとおのが館におちついた、がしかしウォルタリウスはただちに玉座のもとへ馳せ参じた。(214)

(1) flaxinus

(2) cornus

見よ、城の下男どもが門から走り出て、喜びいさんで彼をながめ、誉れ高き勇者が高き鞍^ウより降り立つまで、（彼の）馬を止めていた。それからまず、万事首尾よくいったかどうか、彼らは尋ねた。（だが）彼は多くを語らず、城中に足を踏み入れていた——実に彼は疲れていたのだ——そして彼は王の寝所へ急いだ。彼はそこで一人で坐っているヒルトグントを見つけた。彼は抱擁と甘い接吻のあとで、彼女にこう言った、「早くここへ飲み物を持ってきてくれ、わしは疲れて息苦しいから。」彼女はただちにぶどう酒で高価な杯を満たし、勇者に差し出した。彼は十字を切って受け取り、そして乙女の手を自分の手と結び合わせた。しかし彼女はそこに立っていて、黙って勇者の顔をうちながめた。ウォルタリウスは（ぶどう酒を）飲み、空になった杯を彼女に返し——なぜならば二人はお互いの間で婚約が交されている事を知っていたから——次の言葉で愛する乙女を励ました、「わしらの両親がお互いの間でわしらの将来について取り決めたことを知っていない事はなくとも、実にわしらは一緒に長い間他国での暮らしに耐え忍んでいる。わしらはどれだけ長く口を閉ざして、まさにこの事を秘めているのか？」乙女は、許嫁がからかってかよような事を言ったのだと思いながら、しばらくの間黙っていたが、しかし続いてこう答えた、「なぜあなたは胸の奥でおしりぞけになった事をお言葉に出しておっしゃるのですか？このような私を妻にすることがたいそう恥ででもあるように、

なぜあなたは心の中で全くはねつけた事をお口に出して納得なさるのですか？」これにたいして思慮深い勇者は答えてこう言った、「そんな事言わないでくれ！よく考えてくれ！決してわしが見せかけの心で話したのではないと、確信してくれ、嘘⁽²⁾ やまやかしを言っているなんて思わないでくれ。ここにはわしら二人以外に誰もいない。そなたの誠実な心がわしに結びついて、（わしが企てたことを）そなたが忠実に総て注意深く守ってくれるとわしが認めるならば、そなたに（わしの）心の総ての秘密を打ち明けよう。」(247)

(1) sella, 本来の意味は「椅子」

(2) nebula, 本来の意味は「霧」

ついに乙女は勇者の膝元に身をかがめて言った、「殿、あなたが（私を）どこへなりとお呼びになるところへ私は進んでお供いたしましょう。そしてあなたのお決めになった御命令以外には何も私はする事を欲しないでしょう。」これにたいしてかの勇者は（言った）、「ともかくわしらの他国での暮らしは快くない。しばしばわしは国許の捨てた土地を思い起こす。そしてそのため急いでひそかに逃れようと願っている。もしヒルトグント一人を（ここへ）残しておくことがわしに苦痛でなかったら、逃亡を偶然数日前に（行なうことが）出来たのだが。」（これにたいして）乙女は心の奥底からこう付け加えた、「あなたの願いはわたしの願いです。ただこのことにだけ私は燃えたっています。殿が命令して下さい。仕合せであれ、不仕合せであれ、愛により全魂を傾けて耐える用意が来ております。」（そこで）ついにワルタリウスは乙女の耳元でこう言った、「結局、王妃はそなたを宝の番人に任じた。それ故（これから話す）わしの言葉を心に刻んでいてくれ、なにはともあれ、王の兜と三重により合せた鎧を——鍛冶屋の印のはいった鎧の事をわしは言っておる——盗み出してくれ、それに中程度の大きさの二つの櫃を取っておいてくれ、この中に、そなたが一つ一つ（の櫃に）まさしく胸の高さまで持ちあげられるまで、パンノニアの（黄金の）腕輪をどっさり入れてくれ、それからわしのために四足の普通の大きさの靴を、そしてそなたのためにも同じ数の靴を用意し

て櫃の中へ詰めてくれ、これでおそらく櫃は上縁まで満たされよう。さらに密かに鍛冶屋で曲がった釣針を求めてくれ、わしらの旅の糧は魚と鳥であろう。(その時) わし自身漁師であるが、しかし獵師でもであろう。こういうことを一週間のうちに細心に満たしてくれ、そなたは旅人にとって何が必要かを聞いた。いかにして逃亡を企てることが出来るか、今やわしは(そなたに)これから打ち明けよう。ポエブス⁽¹⁾が七回目の周行を済ませたら、わしは王、王妃、貴族たち、將軍たちのために、そして召使たちのために、たいそう贅をつくして豪華な餐宴を用意するであろう。そしてすべてのものを策略をもって酔いつぶれさすように努めるであろう、結局何かなされているのか気がつく者は一人もいないであろう。だがそなたはその間お酒をほどほどに楽しみ、そして食卓ではなんとか渴をいやすよう心しなさい。もしほかの者が立ち上がれば、いつもの仕事に戻ってくれ、だがしかしそれからたちまち総ての者を酒の力が打ち負かすであろう。その時同時にわしらは西の国を求めて急ごうではないか。」乙女は勇者の教えを肝に銘じて、(これを)満たした。そして見よ、予定された餐宴の日がやって来た。まさしくウォルタリウスはたいそう費用をかけて馳走を整えた。食卓の中央にはありあまるほど(の馳走)が並んでいた。(そこで)王が壁掛でおおわれた広間へ入って来た。気高い勇者(ウォルタリウス)はいつもの様に王に挨拶を述べ、亜麻と緋色(の布)で飾られた玉座へ彼を導いた。王は席に着き、両側に二人の將軍が着座するように命じた。残りの者たちには内膳頭⁽²⁾自らが(席)を割り当てた。一度に何百もの席が食卓を占め、客はいろいろな料理を楽しみながら、むせかえった。一通り終ると別の料理が持ち込まれ、より抜きの料理が黄金(の器)の中で湯気をたてていた——黄金の器ばかりが亜麻の食卓布の上に置かれている——そして香り高いバックス⁽³⁾が混酒器⁽⁴⁾を並々と満たした。酒の美しい色と甘味が酪酩へと誘った。ウォルタリウスはすべての客に酒と料理を勧めた。(303)

(1) Phoebus, 太陽の事, ポエブスはギリシア神話の日の神アポロの異名

(2) Minister, 宮庭での重要職, 優れた騎士がこれにあたった

(3) *Bachus*, ぶどう酒の事, ギリシア神話の酒の神

(4) *crater*, ぶどう酒と水を混ぜるための瓶

餐宴によって空腹が満たされ、食卓が片付けられた時、いまや勇者は喜ばしげに君主に向かって言った、「殿がなにはともあれ御自身を、ついでほかの者たちを楽しませる事により、殿の御好意が輝かんことを、私は切に願っています。」そして彼はこう語ると共に、祖先の武功を一連の彫刻で伝えている、みごとに手を加えられた大杯を手渡した。王はこれを受け取り一息で飲み干した。そしてただちにほかのすべての者たちが（自分を）真似るよう命じた。酌人が急いで走り来たり、またすぐさま走り戻っていった。酌人は満満た杯を差し出し、空の杯を受け取っていた。供応者（ヴァルタリウス）と王の鼓舞によりすべての者は競い合った。（まもなく）広間いっぱい熱興が燃えたつばかりにみなぎった。うるんだ口からろれつの回らぬ言葉がほとぼしり出て来た。屈強な勇士どもがちどり足で歩くのが見られたであろう。総ての者が酒の力によって打ちひしがれ、眠気に圧せられて、柱廊の至る所で、地の上に倒れ伏すまで、こうしてヴァルタリウスは夜遅くまでバックスの役目を引き延ばし、家路につこうとしている者を引き留めた。そしてヴァルタリウスが城に燃えたつ炎を放ったとしても、その事に気がつく事が出来た者は一人も残っていなかったであろう。ついに彼は愛する乙女を呼び寄せて、用意された品物をすみやかに持って来るように命じた。そして彼自ら馬小屋から勝利に輝いた馬を引き出した。彼はその馬に力強いが故に獅子の名を付していた。（馬小屋で）その馬は立っていて、泡にまみれた^{くつわ}轡を荒々しく噛んでいた。彼がいつもの様にこの馬に鞍を置いたあとで、見よ、彼は宝の一杯詰まった櫃を（馬の）両側に掛けた。そして長旅にかなった食料を添えた。それから彼は乙女の右手に、揺れる手綱を手渡した。彼自らはさながら巨人の如く甲冑で身を固め、赤い羽毛飾の付いた兜^{かぶと}を頭にかぶった。それから彼は隆々としたふくらはぎに黄金の臍^{すわあて}当をあて、諸刃の剣を左の腰に帯び、そしてパンノニア風にもう一本を右の腰に帯びた。しかしこの剣は一方の方向からのみ傷を負わせるだけである。それから彼は右手に槍を、左手に楯をとって、この

疎ましい地を不安な気持で去り始めていた。乙女はたくさんの宝を荷なつた馬を率い、そして同時に彼女自ら手にはしばみ様の枝を握った。この枝を使って釣り人は、魚がえさを求めて釣り針を飲み込むようにと、釣り針を波間へ投げ込むのである。まさしくこの逞しい勇者は（身体の）まわりを武具でおおっていた。そして戦いが起りはせぬかと絶えず気づかっていた。まさしく彼らは急いで夜通し逃れ続けた、だが赤く輝くポエブスが地上に最初の光を差し伸ばした時、彼らは森の中に身を隠そうと努め、そして暗い場所を探し求めた。安全な場所でさえ、絶えず沸き起る恐怖が（彼らを）駆り立てた。風のそよぎにも身を震わせ、鳥の飛ぶ音にも、小枝のざわめきにもおののくほどに激しく乙女の胸のうちには不安が脈打っていた。此方には異郷への憎しみがあり、彼方には祖国への愛がある。二人は村々を避けて通り、みごとに耕された田畑には近づかなかつた。彼らは樹木のおい茂った山地の曲りくねった間道を急ぎ、道なき道を通してふるえる足どりを進めた。(357)

だが都城の武士どもは眠りと酒により力を失ない、翌日の昼までじっと横たわっていた。しかし立ち上がった後に、誰もが礼を述べ、おごそかに讃えて挨拶を贈らんがために、将帥（ヴァルタリウス）を探し求めた。一方アッティラ王は両の手で頭を抱えて寝所から出て来た。そして痛みのあまりに、己が苦しみを訴えんがために、ヴァルタリウスを呼ばわった。家来たちは、勇者を見い出す事が出来なかつたと王に答えた。しかし王はヴァルタリウスが今なおも眠りに包まれて静かに臥しており、眠りのために人目のつかぬ場所を選んだ事を期待していた。オスピリンはヒルトグントの姿が見えず、まずいつもの様に衣裳を持って来ないのに気づいた時、悲しみのあまりに、恐ろしいほどの叫び声をあげて王に言った、「ああ、昨日わたしたちがいただいたのは呪わしい御料理だったわ。ああ、すべてのパンノニア人を滅ぼしたお酒。わたしがあなたにもうずっと前に予感して、申しあげた事を、わたしたちが決して忘れることが出来ないこの日が裏付けました。今日あなたのお国の支柱が倒れた事が知られます。あの力強き（男）、名高き勇猛な（男は）遠くに行ってしまいました。パンノニ

アの光，ウォルタリウスはここから逃げて行ってしまいました。彼は私の大切な養女ヒルトグントも連れて行ってしまいました。」(379)

今や王は激しい怒りに燃えた。悲しみの心が以前の喜びにとって変った。彼はマント⁽¹⁾を肩から裾まですっかり引き裂き、そして今や悲しい思いをあちらへ、こちらへと巡らせた。ちょうどアエオルス⁽²⁾の嵐によって砂がまいあげられるように、王の心の中は心配でかき乱された。(彼の)うつろぎやすい心はその時々顔つきによって表わされ、彼は心のうちに抱いている総てを外に押し出した。そして怒りは一言をも語ることを(彼に)許さなかった。もちろん彼はこの日は飲物も食物もはねつけた。心痛は四肢に心地よい安らぎを与える事が出来なかった。事実暗い夜がすでに諸々の物から色を奪い去ってしまった時には、彼は床についたが、しかし右や左に寝返りをうって、目を閉じることが出来なかった。そしてあたかも胸が鋭い投げ槍でつらぬかれたかのように、彼はぎくっと震え、たちまち頭をあちらこちらへ投げ打った。それから気が狂ったように床に立ち上がってまた坐った。そんな事をして何の役にも立たなかった、それでとうとう立ち上がって城の中を走り回った。それから戻って来て、床に触れると同時に又離れた。こうしてアッティラは眠れぬ夜を過した。だが一方、逃れる二人は静寂を味方にして厭うべき地をあとにするように急いだ。(401)

(1) trabea, 国王, 騎士が着た緋色の上衣

(2) Aeolus, ギリシア神話のアイオロスは風を司る神, 「オデッセイア」の第九巻でオデッセウスはアイオロスの島に流れ着く

しかし夜が明けるや否や、王は廷臣たちを呼んで言った、「もし逃げたウォルタリウスをごろつき犬のように鎖に繋いでわしのところへ連れて来る者があれば、わしはその者を直ちに純金で飾るであろう、そしてその者が地上にあるかぎりきつと四方から純金をどっさり与えよう、又誓って、財宝でがっちり道をふさぐであろう。」しかし国中には、己が力を示し、己が勇気により永遠の榮譽にあずかろうと、どんなに願ってみても、又同時に懐を財貨で埋めつくそうと望んでも、やはり武器をとって怒れるウォルタリウスを追いかけ、そしてかの勇者と抜き身の刀で渡り合おうとする

一人の公爵も、又侯爵も、伯爵も、一人の騎士、あるいは家来もいなかった。事実（ウォルタリウスの）勇気は知れわたっていた。この勝利者は傷一つ負わずに、どれだけ多くの打撃を（敵に）与えたかということも知られていた。この条件で約束された財宝を望む勇士の一人すら、王は説得することが出来なかった。(418)

私が語ったように、逃れゆくウォルタリウスは夜（にのみ）旅を続けた、そして昼間は谷間と茂みを捜し求め、鳥をうまく誘き寄せ、ある時にはとりもちを使って、又ある時には木を断ち切って、同じようにうまく捕えた。それから川が曲がって流れているところへ彼がやって来た時には、釣り針を投げ入れて、深みから獲物をとった。こうして骨折りに耐えて、飢えの苦しみを追い払った。まさしく逃亡の間中、蒼れ高き勇者ウォルタリウスは乙女に対する情欲を抑えていた。(427)

見よ、ウォルタリウスがバンノニアの都から逃れ去って以来、太陽は四十回目の回転を終っていた。まさしくこの数を数えきったその日に、日が暮れた頃、彼はすでにとある大河にやって来ていた。即ちレヌス河⁽¹⁾である。そこからこの流れは玉座に輝けるウォルマティアという名の都に向かって（流れて）いる。ウォルタリウスは渡し料として先に捕った魚を渡して、そしてただちに（河を）渡りきると、急ぎあえいで歩を進めた。(435)

(1) Rhenus, ライン河

(2) Wormatia, 現在のウォルムス

朝が暗い夜を追い払ってしまってから、渡し守は（床から）起きあがり、かの都に赴いた。そして彼は王の料理人で、料理人の長でもある者に、旅の勇士が彼に与えた魚を手渡した。この料理人は薬味を添えてこの魚をグンタリウス王に差し出した。（すると王は）驚いて玉座から言った、「わしはフランキアでかような魚をいまだ見たことがない、それは他国からのものとわしは思う。どこの男がそれを持って来たのか、ただちにわしに言うがよい。」かの料理人は答えて、渡し守がくれたことを語った。王はその男を連れて来るように命じた。そして彼が（王の前に）進み出た。

時、その件について問われたあとで、次の如き言葉を述べ、順序よく出来事を語った、「昨日の夕方、私はレヌス河の岸辺に腰を下ろしておりました。するとまるで戦^{いくさ}でもあるかのように身体中を武具で固めた旅の男が急ぎ足でやって来るのが、わかりました。名高き王様、実にかの男はがっしりと銅で身を包んでいました。そして彼は楯と輝ける槍をかざして歩みよって来ました。実に彼は力強い勇者に似ていました。彼はたいそうな荷を負っていましたが、しかし力強い歩みを運んでいました。輝くばかりにいと美しい乙女がこの男のあとからやって来ました。そして今や彼にびったりとついて来ました。背中にたしかに小さくはない二つの櫃を背負った力剛い馬の手綱を彼女自ら操^とっていました。その馬が首を上へふり上げ、曲がった足を堂々と立てようとした時、櫃は、あたかも誰かが宝石に黄金を打ち合せたかの如き響きをたてていました。この男がお礼に今ある魚を私にくれたのです。」(463)

ハガノはこれを聞いて——もちろん彼は同席していた——大いに喜び心から一同にこう語った、「かくの如きことを知ったが故に、お願いです、喜んで下され！わが友ウォルタリウスがフニ人のもとからたち戻って来たのです。」王グンタリウスはそれ故に傲慢にも（それを聞いて）叫んだ、たちまちそれにたいして賛同の声があたり一面に響きわたった。「かくなる事を聞き知ったが故に、わしは命ずる、喜ぶがよい！（父の）ギビユ（王）が東の王に送った宝を今や全能なる神がこのわしの国へ返したもうたのだ。」彼はこう言い、テーブルを足でのけて立ち上がり、馬を引き出し、そして木彫の鞍を置くように命じた。そして、彼自らすべての武士たちの中から十二人の力の優れたる、かつしばしば勇気の認められたる勇士を選び出した。彼らとともに同じくハガノにも赴くように命じた。彼はかつてからの忠義とかつての仲間を思って、王を説得することにとりかかろうと努めた。しかしそれにもかかわらず、これに対して王は断固と押し通した。そして言った、「ためらうな、武士ども、剛い身体に剣を帯びよ、今や小札^{こざねよろい}で身体を守るがよい。あの男はかのように多くの宝をフランクシア人のもとから持ち出すのか？」武具に身を固めて——まさしく王の命

令が（武士たちを）駆りたてた——汝，ヴァルタリウスを見い出すことを願ひ，そしてこの戦いを好まぬ男から財宝をだましとらんと考えて，彼らは（城）門から進発しつつあった。だがしかし，ハガノは（かくなる事を）ただ防ぐことのみに懸命であった。しかしこの不幸なる王はこの企てを考えなおそうとはしなかった。(488)

そうこうするうちに，意気高き勇者は（レヌス）河から進み至って，その頃すでにウォサグス⁽¹⁾と呼ばれていた山地に到達していた。まさしくこの森はおそろしく深く広く，獣のたくさんの棲みかがあり，常に犬（のほえ声）と角笛（の音）が響きわたっていた。二つの山がそれぞれ並び合っていて，その間には，狭いとはいえ，みごとな谷が横たわっていた。それは地面のくぼみではなく，岩のいただきで作られていた。その場所は実に残忍な盗賊たちにとって恰好の場所であった。（しかも）この隠れ場には青々としたしなやかな草が生えていた。「あそこへ」若者が（これを）認めるやただちに言った，「あそこへ行こうではないか，あの場所で疲れた体を横たえる事は喜ばしい。」実に彼がアウェアス人のもとから逃れ去って以来，楯にもたれかかるほかに，まさしく眠りの安らぎを味わうことは出来なかった。彼はやっと目を閉じることが出来るのだ。ついに彼は武具を下ろし，乙女の膝に寄って言った，「ヒルトグントよ，注意深くあたりを見回し，もし黒い土煙が舞い上がるのをそなたが見たら，やさしく触れて，わしが起きるようにながしてくれ，そしてたとえ恐ろしいほどの騎士の群がやって来るのに気づいても，わしの愛する人よ，いきなり眠りからゆすぶり起さないように，気をつけてくれ。／ほんとうにそなたはここからかなたへ澄んだ目を差し向ける事が出来る。絶えず回り一帯に気をくぼってくれ。／」彼はこう言うと，まさしく輝ける目を閉じていた。今や彼は長い間願っていた安らぎを楽しんだ。(512)

(1) Vosagus, フランス北東部のヴォージュ山脈

だがグンタリウスが砂に足跡を認めた時，早駆ける馬に激しく拍車をかけ，そして徒に勇氣にはやって，宙に向けて言い放った。「者共，急げ，今やまもなくお前たちはあの者を捕えよう。奴は今日は決して逃れられはす

まい。盗んだ財宝を手放さねばなるまい。」だがこれに対して名高きハガノは直ちに言い返した、「いとも剛毅なる王様，私は殿にただ一つの事だけ申しあげよう。もしも殿が，ウォルタリウスが戦うのを，そして絶えず新たに猛り狂い殺戮を行うのを私のように，しばしば御覧になれば，決して（彼から）奪いとることなぞかりそめにも御考にならないでしょう。彼ら（フニ人）が北の国，あるいは南の国と戦った時，私はパンノニアの戦列を見ました。そこでウォルタリウスは己れの勇猛に輝き，敵どもに憎むべき者として，仲間たちには感歎される者として迎えられました。彼と渡り合った者は，たちまち地獄⁽¹⁾を見るのでした。王と郎党たちよ，どんなに彼が力強く楯をかざし，なんと猛々しく槍を投げるかを見て来た私の言う事を，信じて下され。」しかしグンタリウスは愚かな考えに煩わされて，決して気を変える事が出来なかったので，一行はあの洞穴に近づきつつあった。(531)

- (1) Tartara, ギリシア神話における冥界の一つ，そこにおいて極悪人が地上で犯した罪のために罰を受ける。特に神に対する反逆者が送られた所

しかしヒルトグントが山の頂から遠くを眺めていると，（土）埃をたててやって来る（一行）に気づき，まさしくウォルタリウスにやさしく触れ，目覚めるようにうながした。彼は頭を上げながら，誰かがやって来るのかと尋ねた。遠くから武士の一隊が疾駆して来ると彼女は答えた。ただちに彼は目から眠りのもやをぬぐいとり，一つ一つ鉄の（甲冑）で，強靱な肢体を固めた。それから再び重い楯と槍を手にとり，躍りながら槍で虚空をうがち，辛辣な戦いの（準備の）ため，敏活に槍をふりまわした。見よ，乙女は（たくさんの）槍が輝くのを間近に見て，おおいに驚いて言った，「そこにフニ人がやって来ました。」そして地に身を投げ出し，悲しみにあふれて，言った，「殿，お約束通りに（あなたの）妻になる事が私に相応しくないのなら，他のどんな男との交わりをも耐えなくともよいように，お願いします，私の首を剣ではねて下さいませ。」そこで若者は「無垢なる血はわしを汚せぬ。」と（言い），さらに言った，「もし今やわしの剣が誠実な恋人を傷つけるならば，どうして敵を地に打ちふす事が出来

ようか。そなたの願いが消え、そしてそなたの心が怖れから解きほぐされるように、数々の危険からわしをしばしば救い出してくださったお方が、ここでもわしらの敵を滅ぼして下さると信じておる。」こう言うと、彼は目を仰ぎ、自らに言った、「そこに来ているのはアヴァレス人ではなく、ここらあたりに住まわっている霧のフランキア人^④であるわ。」見よ、彼がハガノの兜を見つけ、(彼を)認めると笑いながらこう付け加えた、「そこへ来ているのは、わしの旧友ハガノであるわ。」(558)

(1) Franci nebulones, 詩人はフランク族を ニーベルン 族 (霧の国の人々の意) と考えている

こう言い終ると、勇者はこの場所の入口に近づいた。そしてもっと下に立っている乙女に言った、「今やわしはこの入口の前で誇り高い言葉を語ろう、『無事に莫大な宝の幾らかを奪ったと、ここから帰って妻にいかなるフランキア人も言うことはあるまい。』」こう言い終るや否や、見よ、彼は地面に身を投げだし、今言った事の許しを乞うた。(それから)立ち上がった後に、(あたり)総てを注意深く見回し、「ハガノ以外にわしが目にしているものたちの誰も問題にはならぬ。なぜなら彼こそはわしの戦いの技を知っているから、その上彼は戦いの技も心得ている。わしは神の加護を得て、この男(ハガノ)一人の技を受けとめることが出来るならば、その時は」と彼は言った、「許嫁のヒルトグントよ、わしはそなたのために戦いから無傷で戻るであろう。」(571)

しかしハガノはウォルタリウスがこのように構えているのを見てとると、たちまち高慢な王に、こう言って進言した、「殿、あの敵に戦いを挑むのはおやめ下され、まず使者が赴き、あの男の素生、祖国、氏、どこから来たのか、またあの男が平和を求め、血を流さずに宝を手渡すかどうか、ありとあらゆる事を尋ねるがよろしゅうございましょう。あの男の答え方で、敵の正体を知る事が出来ましょう。もしウォルタリウスがそこにおれば、——彼は思慮深い——おそらく殿に誉を与えることとございましょう。」(580)

そこで王はカマロと呼ばれる男に命じて馬を駆らせた。この男をすでに

名高きフランキア人たちがメッティス⁽¹⁾の町の代官⁽²⁾に任じていた。そして彼は贈物を携えて、王が例の事を知る前の日の昼の間に到着していた。(そこで)この男は手綱をゆるめて疾駆した。速かなエウルス⁽³⁾に似て、彼は野中を突っ切って行き、若者に近づいた。そして向いあっている若者にこう呼びかけた、「言ってくれ、そなたは誰か、どこから来て、どこへ行こうとしているのか？」そこで気高い勇者はこう言って答えた、「そなたはそなたの意志で来たのか、(それとも)誰かがそなたをここへ遣わしたのか、わしは知りたいものだ。」そこでカマロは傲慢な口調でこう答えた、「では知るがよい、この国の力強き王グンタリウスが、そなたの旅の理由を尋ねるために、わしを遣わしたのだ。」(593)

(1) Mettis, 現在のメス, フランス東部, モーゼル県の主都

(2) praefectus, 委任統治権者

(3) eurus, 東風, 疾風

若者はこれを聞くとこう言って答えた、「なに故に旅人の身の上を尋ねる必要があるのか、わしには全くわからぬが、それを口に出すのをわしははばかりはせぬ、わしの名はワルタリウス、アクィタニアの生れである。少時に、父上のため人質としてフニ人のもとに遣^やられ、そこでずっと過していたが、今や故郷と愛する^{くにびと}国人を再び目にすることを願って帰路についておる。」これに対して使者は(言った。)^{おなご}「さきに話した凜々しき殿がわしを通じて、櫃を荷んだ馬と女子を引き渡すよう、そなたに命じておられる。もしそなたが進んでそうするなら、殿はそなたの生命を許されるであろう。」(603)

ワルタリウスはこれに対して大胆にこう言った、「思慮深い人がこれほど愚かな事を語るのをわしは聞いたことがない。そなたの言うには、殿か、何者かわからぬ者が手に入れずに、そしておそらく手に入れないであろうものを約束している。わしの生命を許すことが出来るとは、彼は神なのか？彼は手でわしを捕えたのか？彼はわしを牢獄へおしこめたのか？あるいはわしの腕を背中で鎖で縛りあげたのか？だが聞け、もし彼がわしを戦いから解き放すなら——彼が甲冑に身を固めて、戦いにやって来たのが

わしに見える——もちろんわしは王の名に敬意を表するため、赤金でしつらえた腕輪を百個彼に贈ろう。」かの男はかような返事を得て、取って返し、彼が伝えたこと、また受けた返事を騎士たちに報告した。(616)

それからハガノは王に（言った）、「差し出された宝を受け取りなさいませ、殿、それで殿の供の者を飾ることがお出来になりましょう。今戦いから手を引くようお考えになって下さいませ。殿はウォルタリウスと（彼の）驚くべき勇気を御存じありませぬ。昨夜夢幻が私に知らせたように、もし我々が（戦を）初めるならば、総ての仕合せは我々に伴わないでしょう。私（の見た）夢幻は殿が熊と闘うものでした。その熊は長い格闘のあと、殿の脚を膝とふとももに至るまで、すっかり食いちぎってしまいました。そしてただちに（殿を）お助けにまいり、そして槍をかざす私にその熊は襲いかかり、（私の）片方の目をくり抜き、齒をむしり取りました。」(627)

かの傲慢な王はこれを聞いて叫んだ、「わしの見るところ、そちはそちの父ハガチオに似ておるわい、あの男は冷徹な胸のうちにも臆病気を持っていて、色々喋って戦いを嫌っておったわい。」(631)

そこで勇士（ハガノ）は大いなる怒を抱いたのも当然であった、もし主君に対して怒る事が許されるならば。「さあ」と彼は言った「すべてがそなたたちの槍で決せられん事を。そなたたちが求めた男は真向いにおる。各々方戦うがよろしかろう。そなたたちは（あの男の）真近に迫っておる。今や恐れは誰をも防げまい。わしは結末を見たい、が分捕り分の分前には与りたくはない。」彼は（こう）言って、次いで手近の丘をめざしていき、馬から降りて坐り、かなたを眺めた。(639)

このあとでグンタリウスはカマロに命じた、「行け、そして総ての宝をわしに引き渡すよう命じるがよい。もし奴がためらうなら、——お前は勇ましく、大胆な男である事を、わしは知っておる——戦え、そして戦いに破れたる男から略奪してくるがよい。」(643)

メッティスの代官カマロは（こうして）進んで行った。頭には黄金色の兜が、胸には鎧が輝いていた。そして彼は彼方へ向かって、大声で呼ばわ

って言った、「おーい、聞くがよい、友よ。もしそなたが生命と息災をもつと長く保っていこうと望むなら、フランキア人の王に総ての宝を引き渡すがよかるう。」この言葉に対して猛き勇士は大胆不敵な敵がいよいよ近くに迫って来るのを待ちながら、しばらくの間黙っていた。使者は疾駆しながら、その言葉を繰り返した。そこで若者は静かにこう返事を投げかけた、「そなたは何を求めておるのか、好ましからぬ者よ、わしが何を引き渡すようにそなたは求めるのか？わしがグンタリウス王からかような物を盗んだのか？それとも彼がわしに何か貸しつけていたのか、多くの利子を支払うように彼がわしに強いるのが当然であるように。わしは途中、そなたたちの土地に損害を与えたのか、それ故、そなたによって奪われる事が当然であると思われるほどに。もしそなたたちの族が、総ての人々にかくも憎しみを表わし、旅人の誰一人としてこの地を踏む事を許さないならば、見よ、わしは通行料を払おう、（そのために）王に二百個の腕輪を渡そう。さあ彼が戦いをやめ、平和を与えん事を」(663)

カマロがこれを狂暴な気持で聞いたあとで、言った、「貴様が櫃を開けると、貴様は贈物を増やすであろう。今やわしはあらゆる言葉を終らせる事を欲する。貴様は宝を手放すか、あるいは血でもって生命を落とすであろう。」彼はこう言い、そして三重の楯を腕にとって輝ける槍を振り、すべての力をふるって（身を）支え、そして（槍を）投げた。しかし若者は注意深く槍を避けた。飛ぶ槍は地面を裂き、むなしく傷つけた。(671)

ついにウァルタリウスは、「望みとあらば、相手をしよう！」と叫んだ。そして同時にこう言いながら槍を投げ返した。しかしこの槍は楯の左側を通り抜けた。見よ、槍は、カマロが剣を引き抜きかかった手を、太ももに釘づけとなし、馬の背に突き刺さった。ただちに馬が傷（の痛み）を感じると、暴れ、そしてたてがみをふるわせ、騎士をふり落そうとした。もし槍が（彼を）しっかりとらえなかったなら、おそらくそうだったであろう。(679)

その間に、カマロは楯を捨て、左手で槍を握り、右手を（太ももから）

放そうと懸命であった。名高き勇者はたちまちこれを認め、疾駆し、そして（相手の）足を押えて柄まで刀を突き入れた。それを抜くと共に、槍を（馬の）傷から引っ張り出した。すると馬と乗り手は同時に倒れた。そしてカマロの甥がたまたまこれを見て——彼は（カマロ）自身の兄の息子でキモと呼ばわれた、（また）彼はスカラムンドゥスとも呼ばわれていたとある人々は伝えている——溜め息をつき、そして涙でもっていとも悲しげに総て（の人々）に向かって話した、「おお、（ウォルタリウスを）やっつけることを誰よりもまずわしが引き受けた。今やわしは（伯父と）一緒に死ぬであろうか、あるいは大切な伯父の仇を討つであろう。」実に場所の狭さが、一対一で戦うことを強いた。誰かが他の者に助立ちする事が出来なかった。哀れなスカラムンドゥスはすでに死ぬべき運命にあって、広い穂先の二本の槍を手にも振り回して疾駆した。その間ウォルタリウスが恐れていず、一步も退かずに構えているのを見た彼は、歯ぎしりをして（兜の）馬の尾の飾りを頭上で振りながら、こう言った、「貴様は何に頼っているのか、貴様の望みは何であるのか？わしはすでに宝をも、そなたの財産の何をも望んでいない。だが、殺された縁者の生命を求める。」これに対してかの（勇者は言った）、「わしが先に戦いを初めたか、あるいはなぜわしが潔いを受けるに値するのか、もしそなたが証拠立てるならば、躊躇なくそなたの槍がわしをつらぬくがよい。」まだ彼は話を閉じてはいなかった。見よ、スカラムンドゥスは二本の槍の一本を彼に投げ、そして遅滞なく他の（一本をも投げた）。名高き勇士はそれらの一本を避け、楯から次の（槍）を振り落としたりした。それからスカラムンドゥスは鋭い刀の刃を抜いて、（相手の）額をたち割らん事を欲して、若者に向かって突進した。そして狂える馬にまたがってかの男のより近くに迫ったが、頭に力強い一撃を加える事は出来なかった。しかし彼は（ウォルタリウスの）兜に（刀の）柄を打ちあてた。兜は反響し響き鳴った。そして同時に火花を宙に散らした。だが彼は元気な馬を御する事は出来なかった、ついにウォルタリウスは（相手の）頤下へ槍の一撃を加えそして高き鞍から死なんとする者を落とした。彼は（命）乞いをする者の頭を己が刀で切りつけ、（そ

の者の)縁者と同じく血を流させた。(719)

スカラムンドゥスが倒れたのを意気高きグンタリウスが認めた時、戦いを新たに初めるように、いきりたつ武士どもを駆り立てた、「奴を襲い、奴が疲れはてるまで、息をつかさせるまい。それから奴は鎖に連がれて宝を手渡し、(流した)血のため罰を受けるであろう。」見よ、ヴェリンハルドゥスが三人目に赴き、戦いを初めた、おお、誉高き勇士、(休戦の)盟約を破棄することを(アテネー女神に)すすめられて、アキウィ人⁽¹⁾の只中に最初に矢をうち込んだパンダルス⁽²⁾よ、古い血脈とはいえ、汝の血縁、そして技芸のたしなみ手(のヴェリンハルドゥス)。この男は槍を侮り、矢筒と矢を背負い、均合いのとれていない戦いでウォルタリウスをかき乱すために、遠くから矢を射った。だがこれに対してかの勇者は七重の円形の楯をかざして凜々しく踏みとどまり、絶えず(飛び)来たる矢を注意深く避けた。まさしく彼はときには躍びのき、ときには楯を南風にかざし、そして矢を払いのけた。それで一つとして彼にあたらなかった。パンダルスの子孫は矢が無駄に失なわれたのを見た時、怒って直ちに両刃の長刀を抜いて、疾駆し、(ウォルタリウスに)こう言葉を口から放った、「狡猾者よ、貴様がもし風の如き早い矢を愚弄したとしても、おそらくたちまち振り回している右手からの一撃をくらうであろう。」(741)

(1) アカイア人、トロイアを包囲したギリシア人

(2) 弓の名手でリュキア人を率いてトロイア軍に加勢した

ウォルタリウスは彼に心から笑って語った、「実にわしは戦いがしかるべき力で行なわれる事をかなり前から待ち望んでいる。急ぐがよい。わしが遅れをとる事はないだろう。」(こう)彼は言って、全身で力をこめて鉄(の槍)を投げた。槍は飛び、馬の胸を裂いた。馬は垂直に立ち上がり、ひづめで宙を蹴り、そして乗り手を振り落とし、この上に倒れた。若者は走りより、この男から無理やり両刃の長刀を奪い取った。勇者(ウォルタリウス)は(この男の)兜を打ちくだき、白い髪を掴み、そして幾重にも(命)乞いを重ねる男に言った、「お前はかような言葉を先ほどは宙に向かって放たなかった。」彼はこう言って、(その男の)首から切り落

された胴を横たえた。(753)